
Blossom番外編

朔野 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blossom番外編

【Zコード】

N2349BA

【作者名】

朔野 凪

【あらすじ】

『Blossom』の番外編シリーズ。各編で時系列が前後するので読む際はご注意を。（Pixiv、小説サイト『emotional sentence』にて公開中）

Valentine short (前書き)

キス（軽いもの）までの表現があります。
甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

時系列的には、桃歌1年、サキ2年、年明けて2月です。

Valentine short

「あ……」

忘れかけていた。

こんなことを言つたら日本中の女の子達に白い目で見られてしまふかもしれない。

調理室の前を通りかかったときに田川に入つた、『バレンタイン』の文字。

追い出しコンパの公演の準備で忙しくて、全く頭の中を素通りしていた大切……であるうイベント。

そういえば、女子ダンス部の方はバレンタイン公演もやるんだった。

最近どことなく男子ヒップホップ部内の雰囲気が変だと思つたのは、これのせいだろう。

サキ先輩、渡さないとへこんじゃうだろうな……。

一度も本命だと、異性に渡したことがない。

女子との友チョコですら、最近は微妙な感じになつていてるくらいで。

あの四人がバレンタインでどれだけ大変になるかは、容易に想像ができた。

それでも、きっと彼らは私一人のチョコを求めてくるだろう。

……考えておかなきゃなあ。

「いたいた！ 桃ちゃん、先輩達探してたよ？」

半ば放心状態でぼーっと廊下を歩いていた私に声をかけたのは、

木田 梢君だった。

入学当時は割と落ち着いていた外見も、今じゃあもうオシャレ君の域にまで達していた。

「え？ 私、ちょっと遅れるって言つておいたはずなんだけど……」

授業のプリントを提出しなければならない用があった。

梢君は、あれ?と言つて、頭をかいた。

「じゃあ、何かあつたのかな……。とりあえず、できるなら早く行つた方がいいかも」

「そつか。うん、ありがと」「わざわざ、きつと自分から私を探しに来てくれただろ? 梢君に感謝しなければならない。」

「あ、そのプリント出しどこ? 『化学のやつ』でしょ」

「いいの? ありがと」

そう言つて爽やかな笑顔を見せて、梢君は走り去つて行つた。

昇降口に急いで降りると、先輩たち四人の他に、一人、小さな女の子が立つていた。

「信じません! あたしの目の前でキスしてくれるまで!」

涙声でそう叫んだ彼女は、赤い目と頬でサキ先輩を力強く見つめていた。

これは……えっと……。

修羅場というやつだらうか。いや、ちょっと違うかもしれない。とにかく何だかすゞーー行きづらい雰囲気だつたのを頑張つて振り切つて、さつきの台詞は聞かなかつたことにして先輩たちの方に駆け寄つた。

「すいません! 何か、用でもありましたか?」

平静を装いつつ、目の前の女の子を見て見ぬふりをしながら声をかけると、サキ先輩が慌てて私の手を掴んだ。

焦つたような半分苦笑いの顔を近づけて、そつと囁いた。

「ゴメン、ちょっと色々あって」

私の体を力強く引き付けて、唇をそつと触れさせた。

本当に軽い、軽いもの。

近くで悲鳴が聞こえたと思つてびっくりして顔を上げると、女の子がその場に泣き崩れていた。

「ごめんなさい……。えっと、色々と。」

「そういうことだから、『めんね

サキ先輩も困ったようにそう言つた。

しかし、女の子は聞こえていないかのよう、「うや」と呟きながら泣き続けるだけだつた。

遂に水瀬先輩が傍に寄つてそつと女の子の頭に手を置いた。

「つたく、泣かしてんじやねえよ。……大丈夫？」元気出して

驚くほどに優しい声と笑顔でそう言つた。

それでも泣き止まない彼女に、水瀬先輩はポケットから何かをして差し出した。

「レモンタブレット……食べる？」

少々場違いのように思えたその言葉で、女の子は顔を少し上げて不思議そうに首をかしげた。

水瀬先輩はいつものへらつとした調子を孕んだ笑顔で無理やりタブレットを彼女の手のひらに押し込んだ。

「マナちゃん、だよね……。俺に、誕生日プレゼントくれたでしょ」

彼の言葉に、女の子ははつとして顔をしつかり上げた。

「どうして……わかつたんですか？」

本当に不思議そうに問う彼女に、水瀬先輩はウインクして唇を一舐めした。

「紙袋、かわいかつたから、もうう前に見ちゃつてた」

大きな目を更に見開いて少し嬉しそうに彼女は笑つた。

強く握り締めていた手の中のタブレットを優しく握りなおして、髪を整える。

「あの……あたし、最初は、芳花先輩のことが好きでした。でも、みんながダメって言うから、どんどん揺らいじやつて……」

ふわふわしていて背も小さくてかわいい印象の彼女は、他のクラスだつたから知らなかつたけれど、すごく友達になりたくなつた。

彼女の言葉を聞いて、水瀬先輩は意味ありげに笑つた。

「サキはわかつた通りにヘタレだから、俺にしどきなつてそれつて……。

と、私が思ったのとは裏腹に、女の子にはその言葉の意味がよくわかつていなかった。

「俺のこと……まだ好き？」

私でもドキドキする、あの甘い声で恥ずかしげもなく問うた。

「……つはい！ でも、あの……」

たじろぐ彼女を尻目に、水瀬先輩はいきなり女の子を抱きしめた。小さく悲鳴が聞こえたが、それは嫌なものでは決してなかつた。

「じゃ、そういうことだから……サキのことなんかで、泣いてんなよ」

優しい声でそう言って、彼女の頭を優しくぽんぽんと叩いた。

予想外の展開、というか、水瀬先輩の行動に唖然として辺りを見回すと、やはりサキ先輩と、その場にいた隼先輩、琴先輩もびっくりしていた。

そもそも、どういったことが最初にあったのか、私はまだ知らなかつた。

「こつそり隼先輩に何があつたのか聞くと、サキ先輩にこの女の子が告白をしたが、彼女がいると言つて断つた。しかし信じなかつた、ということらしい。

でも、彼女は水瀬先輩のことが好きで……？

何だかよくわからなくなってきたけれど、色々とあるのかなあ、と割り切ることにした。

その後、何だか気まずい雰囲気の中、水瀬先輩だけ彼女と一緒にしばらく話すようなので、他の先輩と四人で帰路についた。

「あ！ ねえねえ、桃ちー、バレンタインちょーだいね！」

「え、あ、はい」

なんとなくボーっとしながら、何を話すでもなく歩いていたとき、急に琴先輩が声を上げてそう言った。

そつか……またもや忘れかけていたけれど、バレンタインか……。

「桃歌チャン」

自分の世界にまた浸りかけていると、サキ先輩が私を呼んで笑つた。

その後は何も言わないまま、笑顔で見つめてきて……えーっと。
「さ、サキ先輩にも勿論渡しますからね！？」

怖いというかそういう問題ではなく、それは大前提であろう。「琴先輩に先手をとられたのがそんなに悔しかったのか、機嫌がちよつと悪いときの常のように、変な調子だつた。

ホントに、何がいいかな。

「そうだ……去年の経験から、当口の僕はもう「ものの消化になり

そうだから、覚悟しておけよ」

隼先輩の言葉に、私は驚きながらも納得してしまつた。
だつて、すゞしそうなもの……。

漫画みたいにバレンタインにたくさんもらつてる男子なんて見た
ことないけれど、先輩たちは確實にそつなるだらう。

「うん……考えておきますね、楽しみにしててください」
何だか結構楽しみになつてきた。色々と。

先輩たちの人気は、私の予想を遥かに上回つていた。

朝から先輩たちについていたが、昇降口に着くまででもう私はへ
とへとだつた。私自身は特に何かしていったというわけでもないのだけれど、あまりの人の多さに気疲れしてしまつた。

中にはクラスの友達もいたし、とにかく一年生から三年生まで多
種多様な女の子が次々と先輩たちを引き止めては渡して去つて行く。
何故か男子生徒もちょ「ちよ」といた。その理由は後で知ること
になるなんだけれど。

「なんか……去年よりすゞくないか……」

テンションの高い琴先輩や水瀬先輩とは逆に、サキ先輩はもうつ
んざりといつ感じだつた。

本当に『持ち切れない』チョコの山である。イケメンっていつの
は怖いと思った。

とにかく、引き止められすぎて時間が危うくなっていたので、私は先輩たちと別れた。

昼休みになつて中庭に行くと、先輩たちと、この間の女の子、そして……ぱらぱらと見知らぬ生徒。

「基山チャンきたきた。聞いてくれ！　マナちゃんと付き合つ」とになつた！

マナちゃん、といひの間の小さくほわほわした女の子は恥ずかしそうにつっこりと笑つた。

「富間 麻奈です。よろしくね」

「あ、えっと、基山 桃歌です。」ちらり

麻奈ちゃんは女の私から見てもとにかくかわいらしかった。

高めの声も小さな顔も大きな瞳も。

見とれる、とはちょっと違うけれど、彼女を見つめていると、ほわほわした気分になる。

クラスは違つたし全然話したことがなかつたけれど、少し打ち解けて少しずつ話をしていると、何だか辺りが騒がしくなってきた。

「はいはい、ちょっと待てつて」

何やら隼先輩が何か配つているみたいだつた。

当人は忙しそうなのでサキ先輩に聞いてみると、彼はああ、と言ひながら頭をかいた。

「隼特製のチョコレートケーキ。去年、色々あつて一部の先輩に配つてたんだけど、それが評判になつちゃつたみたいなんだよ」

お菓子作りもうまいのか……と思うと、何だかもうお手上げの気分だつた。

よく見ると、隼先輩のケーキをもらいに来てる人は、全員朝にチョコを渡しに来た人で、男子もいた。

男子生徒は、このために渡したんだろうか……？

「桃ちー、サキ、水瀬とマナちゃん、隼忙しいし食べりやおつぜー」

生徒の列を見ていたら、琴先輩が元気よくそう言つた。

いつもお弁当を食べているレジャーシートの上にまつもより小さな重箱と大量のラッピングされたチョコレート……。

まさか、これ今全部食べるなんてことはしないよね……。

後ろで見ていた麻奈ちゃんがうわあ、とかわいい声を上げた。

「うし！ 張り切つていこー！」

水瀬先輩が急にそう言つてどかつと座り込んだ。

「はい、こっちね、基山チヤンも含めて『皆さんで食べてください』って言われた方。それ以外は一応俺らが一口は食べないとな

そう言つて私と麻奈ちゃんにくつか手渡した。

どれもこれもなんだかすゞく凝つっていて、私的な感想としては、本命かよ……というところだった。

それでも『皆さんで食べてください』っていうのは、厚意なのか、捨てられるよりはマシと思つているのか。

先輩たちは捨てたりはしないだろ？』、ね。

「これサキの分。こっちは水瀬な

大きな紙袋に早くも一杯のチョコを見て、苦笑いしつつもサキ先輩も水瀬先輩も嬉しそうだった。

バレンタインって、やっぱり男の人にとってはもうつたら何でも嬉しいのかな。

ちゃんと私も作ってきたけれど、正直自信なんてあるわけない。まずいものを作ったつもりはないけれど、突出しておしゃべりようなものではないし、個性もないし。

「桃歌ちゃん……どうしたの？」

麻奈ちゃんが遠慮がちにチョコをつまみながら心配そうに声をかけてくれる。

ついつい暗い顔でもしてしまったのかもしれない。

「あ、ううん、何でもないよ。ちょっとだけ、考え方

取り柄がないことが取り柄と言い張れればどれだけ楽なものか。

今更後悔したって今から特技を作れるわけでもなし。

「あのね……あたし、製菓部なんだ。でもね、別にお菓子作るのつまくないよ」

麻奈ちゃんはちょっと恥ずかしそうに肩をすくめた。

「先輩たちがもらつたチョコはどれもおいしいし……あたしも自信がないんだ。でも、多分ね、味じやないし、愛情もじゅうと違うんだと思つの。形式的なものだとしても……あげることが一番重要なんじゃないかなって」

彼女の言葉が私の耳を通りて脳に響く。

そう、なのかな。

自信を持つていかなくや、といつのま、ずっと前にクリアしたはずの課題だった。

だから、卑屈になる気はなかつたけれど、半信半疑に近い自信でもやもやしていた。

「あたしが……先輩にとつてどれだけ特別かわからないけれど……あたしがね、先輩にタブレットもらつたとき、すぐ嬉しかったから、同じ気持ちならいいなって」

あの時のレモンタブレットのこと。

私は、何度も何度もサキ先輩にたくさんのものをもらつている。確かに、すごく嬉しかったと思つ。

「…………そうだね」

悩むようなことでもなかつたけれど、麻奈ちゃんのおかげで気にすることもなくなつた。

ふと水瀬先輩を見たら、彼の麻奈ちゃんを見つめる瞳はとても穏やかだつた。

放課後、私は内心とてもどきどきしていた。

部活があるから、終わつてから渡すことになるだらうけど、実を

言つと異性にチョコを渡すなんて初めてだつたのだ。

なんとなくこの後のことを考えてしまつて、練習中も拳動不審に

なつてしまつ。

最後の休憩に入ったとき、見計らつたように教室のドアが開いた。おずおずと入ってきたのは、サキ先輩のお姉さんたちよりもずっと綺麗な、本当にこの世の人間とは思えないほどの美人だった。
一度見たら忘れないほどの

「咲哉くん、

凛とした声で、彼女は彼を呼んだ。

彼ははつとして振り返ると、私の方をちらつと見てから顔をしかめた。

「……お久しぶりです」

三年生で、美人で、サキ先輩と交流が深い。

もちろん、わかっている……。これまでに何度も、彼女の姿は見てきたから。

「私、咲哉くんにチョコ渡さなくちゃって思つて。去年は結局渡せなかつたから……」

憂いを含んだ笑みも綺麗な彼女は、教室内の人間の視線を一点に受けていたのに、たじろぎもしなかつた。

それだけ見られ慣れているのだろうと、自然にそう思つた。

持つていた小さな紙袋をそつとサキ先輩に差し出すと、綺麗に笑つた。

きつと自然な笑顔なのだろうけれど、それは作り物のように綺麗すぎた。

サキ先輩もそつとそれを受け取つて、小さく感謝を述べた。

異様な沈黙の中、彼女は急に私の方を向いてにっこりと笑つた。

「ごめんね。諦めが悪くて……。咲哉くんの方は、もうすっかり私に気はないのに」

皮肉にも聞こえる言葉。しかし、悪氣があるようには聞こえなかつた。むしろ、自分を嘲笑う響きを含んだ言葉に、身震いがした。

私は、ひとつ首を横に振ることしかできなかつた。
怖い、とは少し違う。

しかし、何事も入る余地のない何かが彼女の周りにはあったように思える。

あの人、万人を魅了しながらも、事件に巻き込まれて立場を失くした、いわば悲劇のヒロインだったなんて。私がこんなことを思うのはおこがましい。そう思つて首を振つた。サキ先輩が私のことを心配そうに見ていたけれど、見ないふりをした。

別に、大丈夫だから。そう自分に言い聞かせて。

「お疲れ様でした」

練習に集中して、なんとか先ほどの憂いを振り落つた。そして、あれほどまで緊張して仕方なかつた下校の時間になってしまったのだった。

サキ先輩は、何も言つていなければ、きっと期待してくれているだろう。

私が自信を失くしていたら、何だかいけない気がする。

コートを着てかばんを持ち、帰る支度の整つたサキ先輩におそるおそる駆け寄る。

「あの……っ」

何故だかすぐ鼓動が速くなつた。自分から告白でもするような緊張。サキ先輩は優しく目で尋ね返す。

「私の……チヨコ、です」

うつむいてしまつたが、そのまま箱を差し出す。

受け取られないことに不安を覚えたが、次の瞬間には腕を引かれていった。

いつもの、優しい抱擁だつた。

「ごめんな、たくさん悩ませてたのに、無視しちゃつて」

そんなことを言つてくれるのが嬉しかつた。普通は気にしなくていいことだ。

花の香りに包まれて、そして彼の暖かさと、頭を撫でてくれる感触。

それだけで、幸せだった。

「ありがとう。すっげえ嬉しいから。安心して」

たまに見せる、余裕のない言葉遣いと笑顔。

それは、彼が素直に感情を表現するときの特徴だったから、私は本当に嬉しかった。

腰をかがめて、顔を近づけてくる。

彼の端整な目、鼻、口、全てを私の視界に独り占めしている。

そう思うと少し照れくさいと共に、この上ない幸せを味わった。サキ先輩は茶目っ氣を含ませて笑つてひとつウインクをすると、この間とは裏腹にしっかりと唇を重ねてきた。

キスというのは、何でもないよう見えて、どうしてこうも甘いのだろう。

近すぎてほんやりとしてピントの合わない瞳で見るのを諦めて、そっと目を閉じる。

それでも彼の笑顔が浮かんでくるのだから、恐ろしいものだと思った。

少しの間そうしていて、どちらからなく離れた。

私の右手をしっかりと握り締めて、サキ先輩は頷いた。

もう先に昇降口に向かつてしまつた先輩たちを追いかけて、急ぎ足で階段を下りる。

下で待つていた先輩たちは、三人とも呆れたようになやけ顔を浮かべていて、私もサキ先輩も恥ずかしくなつたものだった。

「あの、先輩たちにも」

そう言つてそれぞれにチョコを渡すと、みんな笑つてありがとうと言つてくれた。

隼先輩にはその場でケーキを返してもらつたけれど、本当においしくて、ついついテンションが上がつて色々と聞いてしまつた。

いつもの調子でハグを仕掛けてくる琴先輩を（サキ先輩の視線が

怖いので）上手に避けながら、水瀬先輩と麻奈ちゃんの話をして笑つた。

ホワイトティーは、卒業式、つまり追い出しコンパの直前。

……覚えていてくれたらいいな、と思って、ひとりで笑つた。

White Day short (前書き)

キス（軽いもの）までの表現があります。
甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

時系列的には、桃歌1年、サキ2年、年明けて3月です。

White Day short

冷たい空氣の中、桜の木は蕾をたたえている。桃が咲いたと、サキ先輩はお姉さんたちからの桃を持ってきてくれた。

水瀬先輩の髪色も「春カラー」と言つて少し変わった。黒くなってきた琴先輩は、それに便乗するようにぱつさつ切って黒髪になった。

黒といつても、隼先輩と比べると茶色っぽいのだけれど。サキ先輩はいつもカンペキにまだらにもならないんだけど……。ちょっとそれを水瀬先輩に言つたら、私のためにやつてくれている、と教えられた。

そんなこと、気にしないの?」

「気づいてないことないだろ? アイツ、負けず嫌いだから、基山チャンにはちょっとでもカッコ悪いと見せたくねえんだよ」「確かに」…… そななんだけど。

彼は、何もしなくても十分すぎるほどにかっこいいの。「基山チャン…… サキはサキで好きなのはわかつてるけど、こんな環境だ、どうからどうなるかわからんねえよ。不安になるぞ」

いつつもいつつもこんな話ばかりで、水瀬先輩に迷惑かけちゃつてるかな、と思うけど、そんなこと言つても水瀬先輩は笑つた。「妬いちゃうねえ。何度も何度も言つけど、サキは基山ちゃんためいっぱいイヤイイヤしたいがために色々苦労してんだからな」で、でも、四月からは先輩たちも三年生だし、そんなに気にかけていいんですからねつ」

「わーかつてるよ。でもな、やつたくてやつてんだから、口封じられるのはツライぜ?」

ブーツで器用にぐるぐると回つて、反論できないワインクを向けられたから、私は口をつぐむしかなかつた。

「あの、草野先輩は……卒業、楽しみですか？」

たまたま乗った電車で、草野先輩と会った。

だから、ずっと気になつて……いや、不安だつたことを聞いてみた。

眼鏡の向こうで真剣に考える瞳を見ると、何だか少しだけ申し訳なくなってきた。

私にとつては重要かもしれないけれど……彼にとつて、それを言うこととは、どういうことなのか。

「楽しみ……かな」

さんざん考えて発された言葉は、普通の答えだった。

「不安の方が多いこともあるかもしれないけど、これまでのしがらみを一新できるっていうのが……なんか、ね」
らしくなく少しばにかんだ彼を見て、少しだけ不思議な気持ちになつた。

当たり前の考え方で、当たり前のことを言つている。
だけど……。私は、何を期待していたんだろう。

「私は、先輩が卒業しちやうの、不安ですかね？」

何が言いたくてこんなことを言い出したのかわからなかつた。
でも、草野先輩は冷静な視線の中に暖かいものを含んで、微笑みかけてくれた。

「当たり前だよ。俺がこいつ風に思つのも当たり前。だけど、何が起きるかわからなかつた。……良い事があつたら、不安に思わないだろ？」

サキ先輩との出会い。合宿。文化祭。……クリスマス。

不安なことばかりだつた。でも、必ず良い結果は導き出されたではないか。

「そう、ですね」

私の心配がほとんど杞憂に終わつてゐるのは、サキ先輩や、他の先輩のおかげだ。

「もう大丈夫だよ。……基山ちゃんは、一人前だ」「ありがとうございます」

寡黙な草野先輩がたくさん話してくれたのも、嬉しかった。追い出しコンパ、私は全然役に立つてないかも知れない。でも、でもね。

一人で、色々できるようになつたんだもの。私は一人じゃないけど、一人でもできるよ。

「え！？ し、知らなかつたんですけど……」

ホワイトデー大感謝祭。

人気投票+握手会。部員全員参加（三年除く）。

「ああ。だつてヒミツにしてたからな」

少しからかうように言つた隼先輩をちょっと睨もうとすると、彼は笑つて返した。

「チビはやることないから。座つてくれればいい」「え？」

「いつものお礼……だとよ」

向こうにいるサキ先輩を指して言つた。

それが、こんな些細なことが、こんなにも嬉しいことなんて。

「去年は人がたくさん来た。いるだけで気疲れするかもしれないが

……受付、頼む」

「……はい！」

嬉しいよ。みんな感謝してくれているのはわかっているけれど、みんなのために頑張つていてるつもりだから、逆にしてくれると、本当に嬉しい。

「ありがとね」

「ありがとう」

「アリガト！！」

「ありがとー！」

やつぱりたくさん来た女子生徒。

中には男子生徒もいた。ヒップホップ部って、やつぱりすいにんだなあと再確認する。

「すいません」「

先輩たちの様子を眺めていたら、男の子に呼び止められた。

「はい?」

「基山さん、握手してください」

何かあつたかなー、なんて思つて返したら、そう言われて一瞬固まる。

えーと……どうしよう、かな。横目見たサキ先輩は見ていなかつたから、おずおずと立ち上がりて右手を差し出すと、彼は暖かな大きな手で握つた。

恐る恐る見上げた先で、彼は人懐こい笑顔を見せた。

「カワイイなあ。ほんと」

「え、え?」

何だかものすごく嫌な予感がしたのでそーっと手を離して体を離すと、男の子は苦笑いをした。

「安心してください。ただのファンだから」

証拠に彼はなーんにもしてこなかつたけれど、どきどきはなかなか收まらなかつた。

「は、はい……」

顔赤いだらうなあ、と思つて顔に当たた手が、やつぱりひんやりと気持ちよかつた。

「基山さんさ、やつぱり松岡先輩が一番好きなの?」

男の子は再度座るように促してフランクに問い合わせてきた。

困惑しつつ小さく頷く私に、まあ、そりだよね、と返す彼は少しさびしそうだつた。

「あの……」

どうすればいいかなあ。私に、何ができるのか。

「ん、ごめん! これから、友達になつてくれたらなあなんて思つ

てただけだから。じゃね
友達に、なんて言つたのに、引き止める暇もなく彼は去つてしまつた。

机の上に、小さな包みをひっそり残して。

「結果、どうでした？」

「まだわかんないけど……一年はみんな伯仲だよ。そんなもんさ」「とりあえずの開票と片付けを終えて、やつと暇そうになつた琴先輩に聞くと、そう言って笑つた。

「そうそう！ 一年な、梢がだいぶ頑張ってるよ…」

私が梢君とちょっと仲良くしてるのを知つてるから、琴先輩はそう教えてくれた。

梢君、まじめだからね。

「俺ら、サキだけあんまり人気でも、全然気にしないからな。桃ちーがどーんなにかわいくても、サキに妬かないからな！」

無邪気に笑つて言つた琴先輩に、何故だかとても安心した。

「だつて俺らもサキかっこいいって思うからさ。俺、サキが憧れなんだよ」

不器用に優しくて。かつこいいのは外見だけじゃなくて。

おかしいくらいに過保護で。ダンスのときは別人みたいに輝いて。

こんなにも近くにいるのに、彼はたくさんの人憧れを受けて、それなのにあんなに普通に過ごしていいんだ。

そう考へると、すこい、かな。

「そーだ。桃ちー、俺らからお返し、ちゃんとあるからな」

頬杖をつきながら物凄く明るく笑つた琴先輩を見て、バレンタインあげた甲斐あつたかなあ、なんて今更思つた。
彼自身が、とても楽しそうだったから。

墓山さんへ

本当に唐突に「ごめん。下心も何にもないから安心してくれると助かる。

知らないかもしれないけど、俺は隣のクラスの高谷。諦めたつづーか、なんとも言えないんだけど、基山さんに対してそういう感情じゃなくて、ただ単純に仲良くなりたいと思つ。だから、これからよろしくって意味で。

松岡先輩とは、お幸せに。

高谷 樹

あの男の子……高谷君の置いていった包みには、こんな内容の手紙と、カップケーキが入っていた。

先輩に見つからないようにこっそり開けてたけど、隼先輩には見つかってしまったので事情を説明した。
用心するに超したことはないけど、とりあえずは別に大丈夫かなあ。

友達が増えるのは、悪いことではないし。

隼先輩からは、ホワイトチョコのケーキをもらつた。
やつぱりびっくりするほどおいしくて、手作りとは思えなかつた。
水瀬先輩はちょっとしたアクセサリー。

さすがのセンスですごくかわいいものをくれて、でも心が躍つた
なんて本人にはとてもじゃないけど言えなかつた。
琴先輩も髪留めをくれたけど、すごく考えてくれたって言つから、
すごく嬉しかつた。

サキ先輩は、含み笑いのような微笑みを向けて、後でね、と言つた。

「今日、時間ある?」

帰り道で、ふと投げかけられた質問にとっさに頷くと、サキ先輩は安心したように笑つた。

「よかつた。ちょっとせ、家まで来てくれる嬉しい」

もう何度か行つてゐる、サキ先輩の家。

また綺麗なお姉さんたちと会えると思つたら、いついつ日じやな
くても純粋に嬉しかつた。

「勿論行きます」

つないだ手の温もりを直に感じられるから、手袋はしないほうが
いい。

もう温かくなり始めた气温には、必要ないのかもしれないけれど。

「お邪魔します」

「ただいま」

花屋の奥、まだ花の香りの残る玄関を通つて、家中へと入る。
前を歩くサキ先輩の背中で見えなかつたけれど、声からしてお姉
さん達は一人はいるようだつた。

そのままサキ先輩の後をついて、彼の部屋と思しき部屋まで來た。
「ちょっと座つて待つて」

そう言われたので、私はおずおずと床に座つてカバンを下ろした。
綺麗に整理されていて、男の人の部屋とは思えないようなサキ先
輩の部屋は、それでも彼らしいなあ、と思わせるところもたくさん
あつた。

着飾らないけど、それでいてオシャレでカッコイイ。

部屋に戻つてきたサキ先輩にも気づかず、部屋を眺めまわしてい
たから、突然背後から伸びた腕と、そこに抱えられた花束に心底驚
いてしまつた。

「あはは。『ごめん、驚かすつもりはなかつたんだけど』

そう言つて、でもそのまま花束を私の手に渡して、後ろから抱き
しめた。

薄い桃色と、黄色が中心となつてゐる、綺麗でかわいい花束。

「いつもありがとう。俺は、桃歌チャンがいなかつたら、ここまで
心から充実してると言える生活はできていなかつたと思つ

温かい腕の中で、彼の気持ちが、本当に素直に伝わってくる。目の前の花束だけじゃない。彼自身からする良い香りが、伝えてくれる。

「私の方こそ、本当にありがとうございます」
こんなにも、平凡で仕方のない私が、自分の背丈を伸ばして頑張ろうって思えたのは、こんな風な環境にいることができたのは、全てはサキ先輩のおかげだった。

振り返つたすぐその彼の表情は、とんでもなく幸せそうだったから、ついつい、顔が綻んだ。

「大好きだから」

細められた瞳の向こうで、私はどんな顔をしているかな。
サキ先輩と出会わなければ、こんな幸せは、感じられなかつた。
彼もそう言うかもしれない。でも、私にとってはそれは真実だつたから。

綺麗に微笑む彼の抱擁に身を委ねて、甘い香りに包まれる。
お決まりのパターン、と言つてしまえばそれまで。
こんなことに意味が見出せるのは、自慢できることだ。

大好きだから。

たつたそれだけで、幸せになれるのは。

「大好きだからです」

目を閉じて感じた温もりからも伝わってくる、優しい笑顔。
一年間、彼と過ごして、大変なこともたくさんあつたけれど。
これほどまでに幸せなのも、全て彼のおかげだったから。
感謝の気持ちを伝えたいのは、こちらの方のはずだつたんだけど。

「先輩、あの……」

高谷君のことを話そつと思つた。

いつも、こいつの話は隼先輩に聞いてもらつてゐるけれど、それは逃げでしかなかつたかもしれない。

甘えて、頼つていい、と言つてくれる先輩たちだけど、それは適度の問題だ。

「友達になりたいって、男の子に言われたんですけど、ビ�、思いますか……？」

サキ先輩は、意外にも軽く微笑んで、私の頭に手を置いた。

そして、少しだけ言葉を探すように首を捻つて、ゆっくりと口を開いた。

「桃歌チャンは良い子だからさ、俺もダメって言えないうか……」

ああ、そっか、って誰もが思うような苦笑を浮かべて、サキ先輩は続けた。

「悔しいし、妬いちゃうけど、桃歌チャンが、俺のこと……」「だ、大好きです」

聞く方が恥ずかしいかもしれない！ そんな風に思つて、つい口走つてしまつた。

驚いた顔でまた笑つた彼を見て、顔が熱くなるのがわかつた。墓穴を掘つてしまつた……かな。

ちょっと後悔している私をヨソに、サキ先輩はゆっくりと私の頭を撫でた。

嬉しそうに笑う彼を見て、私も嬉しくなつたので、もういいことにした。

「そ、だよね。……ん、アリガト」

私がもし、いくら高谷君と仲良く話す時間が方が、サキ先輩との時間よりも長くても、気持ちは変わらない。

というよりは、そんなことがあつたら、もう私は死んでしまうかもしぬれない。

そう思えるほどに、今の生活で欠かせるものなんてなかつた。いつだって、そうだったと思える。

X - mas2011 - プロローグ（前書き）

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

このプロローグは、Blossom番外編「X - mas2011 - 隻『兄じやなくて』」、Blossom番外編「X - mas2011 - 水瀬『抱えた秘密の重み』」に繋がります。
(パラレルワールドです。)

気温はかなり低くなり、日も短くなつて、街のいたるところではクリスマスソングが流れている。

色々あつた今年も終わりに近づき、そして、多くの人が楽しむ日が目前に迫りつつある。それは……クリスマス！

毎年、一人だから寂しい、なんてことはなくて、友達とか家族と一緒に過ごしているから、私にとって一緒にいるべき人ができた今年が特別というワケでもないけれど……。やっぱり、期待はしてしまう。

お母さんたちや水瀬先輩とかに茶化され始めたけれど、私はなんだか聞けないでいた。サキ先輩の予定、なんて。

「早く予約とつとかないと、彼女だからって一緒にいられないかもしれないぜ？」

「そ、それはないっ……！」と、信じますっ

冗談だつてわかってるけれど、彼と過ごしたいと思つていてる人が少なくないのは事実だろう。

「ま、そのときはフリーの水瀬クンが拾つてやるぜ、子猫ちゃん」私は一層キザ度に磨きのかかつっていた水瀬先輩のからかいの全てを受け流すことができなかつた。

不安に思つてゐるのも、また事実だから。

先輩たちとの会話を思い出して、ベッドの上で一人うなだれる。

でも、いまだに何も言つてくれないサキ先輩のことを一人で心配しまくつていても仕方がないくて、私は彼に早く聞くべきだと思った。うじうじとケータイを開けたり閉めたりを繰り返してためらつていると、ちょうど手の中のそれが着信を告げた。

「も、もしもし？」

タイミングが良いのか悪いのか、サキ先輩からの電話に焦つて声がかなり上ずつてしまふ。

「もしもし、咲哉だけど……。桃歌チャン、『ゴメンっー！』

申し訳なさそうに始めたサキ先輩は、存外に明るい方に深刻そうに謝罪の言葉を述べた。

「え、えつと、はい？」

「その……クリスマスの日、予定空けといたんだけど……。姉さんたちに手伝えつて捕まえられちゃって。売り込み落ち着くまで、抜けられそうになくて」

半分くらい実現してしまった水瀬先輩の言葉に、私は呆然としてしまった。

「そ、それじゃあ私は……。

「本当に『ゴメン』。言い訳のしようもない。でも、なるべく早く抜けられるように頑張るから。夕方くらいからは、ずっと一緒にいような？」

無言の私の絶望を読み取ったのか、サキ先輩は優しい口調でなだめるようにそう告げた。

サキ先輩は全然悪くなくて、だつて家の事情だから……。でも、少なからず期待をしてしまっていた私は、やつぱりへこんでしまっていった。

「ごめんな。最初に直接謝れないのも……。その代わり、終わったら、たくさん楽しませるから！」

「わ……かりま、した。仕方ないですから！」

でも、だつて……という不満と、サキ先輩も辛いはず、という苦心の中の諦めがせめぎ合つて、素直な言葉が口から出なかつた。お決まりの言い回しで電話を切つて、私はベッドに倒れこんだ。今まで、何があつたつて彼は私を優先してくれていたように思つから、こんなことがあるなんて、思つてもいなかつたんだろう。温かくもない布団を抱きかかえて、空しくなるだけで。

「ええーー!? サキひつでえ。つていうかなんていうか、ええーー?」
珍しく、琴先輩だけが駅にいたので、久々に琴先輩と一人で登校

することになった。早速あんまり元気がないことを田代とく指摘され、昨日のことを持ち出すと、私が外に出せなかつたような純粋な感想を吐き出してくれた。

「隼とかから手回してもらえないのかな？」サキの代わりに店主伝つとかさー」

「どうなんでしょう。サキ先輩がまだそんなことも考えてないとは思えませんけど……」

あの頑固な彼が、何も考えずに、何もしようともせずに、自分のしたいことと反することをするとは思えなかつた。

なんてことも、私が自分の都合の良いように考へてるだけかもれしなかつたけれど。

「……でも。したら俺、桃ちーとデートしたいな！寂しいからとかじやなくてさあ、サキつて鬼がいないうちにっ」

「はいはい、桃歌チャンはみんなのマネだ、みんなの桃歌チャンだ。独り占めしていーのは松岡だけっしょ」

嬉しそうにはにかんだ琴先輩を後ろから突き押して顔を出した朝斗先輩は、よ、と手を挙げて琴先輩と私の間に割り込んだ。

そしてそのまま私の方を向いたまま、案の定口を尖らせて、「いやーじやんかよー」と不満そうな琴先輩の肩を、彼は子供をなだめるように叩いた。

「話は大体聞いてた。でも、それ言つたら俺も桃歌チャンとデートしたいぜ？ 部員のみんなに言つたら、桃歌チャン争奪戦が勃発するだらうなア」

「……はあ」

本人抜きで進められていく話を止めることができなくて、私は困り果ててしまった。

サキ先輩とじやなかつたら、誰とクリスマスを過ごしたいんだろう……？

確かに私は部員みんなに平等じやなくちゃいけなくて、サキ先輩

彼氏、という特別な立場以外で、特別に一人を選ぶなんて……。

「サキ先輩は許してくれるんでしょうか？」

「アイツが納得するくらい桃歌チヤンを楽しむせればいいんだろ？」

「俺、それなら自信あるよ！」

瓜一つの千種兄弟に完璧な笑顔を向けられて、言葉に詰まる。

「そ、その話は、また後でしましょっ！？」

拳句の果て、苦笑いで誤魔化して、私は一人を振り切るように先を歩いた。

あんなことは言つても、どうしても腑に落ちなかつたのか、休み時間に琴先輩に呼ばれて、隼先輩の下へといつそり訪れた。もちろん、サキ先輩には見つからないようだ。

「ああ……。クリスマスは花束を売り込むらしいな。サキの隼客力は半端じやないし、アイツ自当でで来る客も多い」

廊下の端に呼び出してもらつた隼先輩は、いつものように落ち着いた黒い瞳を私に向けてそう言つた。

「隼がなんとかできないのかー？」

「残念ながら、松岡の姉さんたちは笹神の人には花屋の仕事は任せはくれないな」

それは、彼女たちなりのケジメなのだろう。詳しいことは知らないと言えど、サキ先輩と隼先輩の家に色々あることは察しがついていた。

そんなことを捻じ曲げるなんて、私に権利のあることじやない。

「あのサキが折れるんだ、桃歌もわかつてるだろ？ 割とどうしようもないことだ。それに、アイツも辛いさ。姉さんたちの手伝いもしなくてはならないが、お前ともいたいだろ」「はい……」

「桃ちー、元気出してくれよお」

心配そうにしてくれる琴先輩に笑いかけて、私は自分の教室へと逃げるよつに小走りで帰つた。

琴先輩とのやり取りもあって、すっかり落胆が増幅されてしまつて、私はため息ばかりついてしまつていた。

昼休みになつて、教室の窓から中庭を覗いてみる。サキ先輩と会うのが、少しだけ心苦しかつた。私は、彼を少なからず責めてしまつてゐるから。

「基山」

手すりに手をかけて隣に並んだのは、和真君だつた。彼らしい明るい笑顔ではなくて、しかしそれも彼らしい真剣な表情だつた。

「大丈夫か？ 今日、ずっと下向いてる」

クラスメイトだからこそ、の彼の気遣いが嬉しかつたけれど、私は色々な人に心配をかけてしまつたことを一人で悔やんだ。

「うん、全然大丈夫だよ」

自分で言つて強がりにしか聞こえなかつたけど、和真君はそれに何も言わないでおいてくれた。

「笑えよ」

そして、少しの沈黙の後、明るい声色でそう言つた。

「……え？」

「基山が笑つてくれないと、なんか、スゲエ不安になる。何か嫌なことでも起きちまいそーな。……たぶんさ、松岡先輩だけじゃなくて、みんなそう思つてる。だから、元気出せつて」

私を元気づけるように笑つた和真君の屈託のない笑顔に、少しだけ心のもやもやがほぐされたような気がした。

「ほら、先輩たち來たぞ。行かなくていいのか？」

「うん、行くね。……ありがと、和真君」

お礼にと笑いかけると、彼は顔を赤くして、そっぽを向いてしまつた。

今は……そう、サキ先輩に会いに行かなきや。

中庭に下りると、既に先輩たち四人はシートに座つてゐた。

「あ、桃ちー」

顔を上げた琴先輩が次の言を発するより早く、サキ先輩は無言で

立ち上がった。

そして、それは一瞬のことだった。

「ゴメン。本当にゴメン。寂しいよな。期待してくれてたよな……」

不満は、全部聞くから

立ちすくむ私をすっぽりと抱きこんで、サキ先輩は彼らしからぬ低い声で私に謝った。

だけれど、そこで、私の中の何かが変わった。

「不満なんて、あるはずないですよ」

考えてみれば、私は、何にそんなに傷ついていたのだろうか。

サキ先輩に捨てられたわけでも、クリスマスに一緒にいられないわけでもなかつた。

彼は、仕事が終わつたらずつと一緒にいてくれると、そう言つたんだから、時間を重要視しない限り、何も不足はない。

「寂しいのは……サキ先輩も、おんなじ、ですよね？」

「うん。……それにさ、俺、店番してる中で、多分何度も誘われたりして、桃歌チヤンを不安にさせちゃうかもしない」「耳が生えていれば、ぺたんと垂れている、みたいな。

急にしゅんとして見えたサキ先輩の優しげな睫毛に、私は柔らかく笑いかけた。

「だつて、サキ先輩は、言つてくれましたから」

『俺には、桃歌チヤンしかいない』、と。

その言葉を信じるなら、何の心配も必要ない。

「ありがとう。あの、それで」

「サキ先輩のお仕事が終わるまで、誰かと一緒にお出かけしてもいいですか？」

すっかり気分が良くなってきた私は、先ほどの千種兄弟の笑顔が忘れないのもあって、彼に聞いてみた。それ以前に、家族も友達も誘えるかもしれないし……。

「その話なんだけど、さ」

少し焦つたような彼の苦笑に、私は首を傾げた。

「え、ええと……それは、いかがなものでしょうか」

「でも基山チャン、家族も友達もアテがないんだろ?」

「つづつ……事実、ですけど」

案の定、部活に行つて水瀬先輩が部員にバラした私のクリスマス事情は、部内の謎の抗争的な事態を引き起こしてしまつていた。家族や友達に、クリスマスの話をしたが、ことごとく逃げられてしまつたのだった。誰もが私はサキ先輩と過ごすものだと思つているから……。

「平等つてやつだぜ! ジャンケンなら俺も朝斗に勝てる自信がある!」

そして、サキ先輩や水瀬先輩、隼先輩までもが認めた案は 。

「ルールは三つ! ? はぐれないようにするために手をつなぐ以外のスキンシップは禁止。? 桃歌チヤンも相手も、ご飯以外であまりお金を使わない。? 松岡から電話があつた時点で終了。何があつても待ち合わせ場所まで桃歌チヤンを送り届ける」

「勿論、了解だぜ?」

「え? え!? これ何のジャンケンつすか! ?」

「最初はグー! ジャンケんぽん!」

（ ジャンケンで勝つ人が、桃歌とデート ）

X - mas2011 - 隼『兄じやなくて』（前書き）

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

この話は、Blossom番外編「X - mas2011 - プロロー
グ」から繋がっています。

Blossom番外編「X - mas2011 - 水瀬『抱えた秘密の
重み』」とはパラレルワールドです。

「 ひとまず、安心だな」

「 は、ははは……」

一本目で一人勝ちを決め込んだ隼先輩は、そういう風に言って私に笑いかけた。

「 ま、理性が効くヤツトシップスリーには入ってるから、安全ではあるかもな？ 隼なんかとデートして楽しいかどうかはともかくとして」

水瀬先輩の皮肉に、無言の睨みで返した彼を見て、私は少しだけ先行きが不安になつた。

しかし、サキ先輩は安心していたみたいだし、それなりに良かつたのかな……。

「 お前、まさか本当に俺と一緒にじゃつまらないとか思つてるわけじゃないだろうな？」

「 ……そんなこと」

声色はいつもと同じに聞こえたのに、視線を送った先の隼先輩は、すねたように眉を潜めていた。

「 妹たちのワガママ聞いて過ごしてんだ、黙つてもやりたい事、当ててやるよ」

得意気に口端を上げてそう言った隼先輩は、なんだか彼らしくもなかつた。しかし、少しだけ感じた子供のような無邪気さに、私は心の中で笑つた。

「 おはよー」
「 おはよー」

「 おはよ。ん？ そんなに珍しいか？」

私よりも先に待ち合わせ場所に来ていた隼先輩は、いつもとは全然違う服装に、髪型に、雰囲気で、私は驚いた。

いつも真ん中で分けていいるサラサラストレートな黒髪を少し外側にハネさせて、オシャレな感じの髪型を作っていて、服装もいつもよりカジュアルな感じで、なんだか……。

「隼先輩じゃないみたい、です」

「はは。そうか、最近こういう風に出かけてなかつたからな。ま、本命のために気合い入れてくるだろう桃歌に対して、いつものじや物足りないし、失礼だろう?」

その通りに気合いの入つていた私は、いつものポニーテールをゆるく巻いて、手慣れない化粧を少ししていた。

「化粧なんてしてるの初めて見たが……。なかなか上手いじゃないか」

私の顔を真正面から見つめて、隼先輩は目を細めた。

「ほとんど初めてみたいなものですよ。今度、教えてくださいね?」

顔を合わせて話すことは少なくないと言えど、いつも他の先輩がいるから、ここまで隼先輩に直視されて話すことは少なくて。濡れた真っ黒の、犬のそれみたいな目で見つめられると、少しどきつとする。

「ああ。だが

頭ひとつ低いところにある私の頭に、ぽんと手が置かれる。

不思議に思つて首を傾げると、真つ直ぐに目を見つめられた。

「サキは、今ままの桃歌でも満足しているぞ?」

穏やかに、しかし核心をつつくような彼の言葉は、私の頭の中で色々な言葉や、私なりの考えと混ざつて、一瞬のうちに消化された。

それは、だつてもう、出会つてから何度も考へていたことで。

「でも、私

今日だけは、隼先輩に諭されてばかりじゃないもん。

頭の上からどかそうと触れた彼の手は、氷のように冷たくって、

私は思わずそのまま握り締めた。

「もつともつと、自分を魅力的にしたいです

私の、温かいとはいえないくらいの手の温度が、冷たい彼の手の温度と分け合つて、同じくらいになつた。

隼先輩は特に何も反応を見せず、すぐにさつと手を引っ込めて、いつもの目で私を見下ろした。

「そうだな」

何かを気にするように、彼は私に背を向けて、ポケットに手を突っ込んだ。

そしてそのまま、首だけこちらに向けた。

「行きたいところとかあるか？ なかつたら計画通り進めるが」「今のところありませんよ、隼先輩の思うようにどうぞ」

あの日、任せてくれ、というような態度だったから、彼はもう前を向いてしまつていただけれど、その背中に笑つて声をかけた。

なんだか、最初は少し誇らしげだったのに、今は何か押し殺したようにいつもの冷静な隼先輩に戻つてしまつた。

「了解。行くぞ」

また、もう一度私を振り返つて歩き出した。

不思議な感覚だつた。実際のところ、あまり彼と一緒にいることは、部活中でもなかつたから。

「隼先輩、どうしていつもこんな感じじゃないんですか？」

やはりカップルの多い、商店街の人ごみの中で、私は唯一頼りにできる彼にそう話しかけた。

「んー……。どう説明しようか。ま、あまりキャラく見られたくなつていうのもあるかな」

前を向いた横顔はそのままに、視線をちらと向けながら答えてくれる。

「……なんですか、意外です」

誰にどう思われようと気にしないタイプだと思つていた。自分は自分なんだから、みたいな。

「なんでだ？ 僕は不良に憧れるような Bieber じょもない女とか、不良な女とはあまり関わりたくないぞ」

少し的外れな解釈と共に、隼先輩は珍しく間の抜けた表情を見せた。

「そうじゃなくって。周りの人があの思つてよつと、カンケーない、みたいに思つてるのかなーと思つてたんです」

どうしても、いつも上から小突かれたり、からかわれたりしているから、こうやって対等に話し合えるのが、少し嬉しいなあ、と思つた。

隼先輩は安心したように頷いて少し上方を見上げた。

「ああ、そういうコトか。……気にしてるよ。実質、ウチの中で俺が一番目立つ立場にある。それにまあ、よく睨んでるとか言われるからな」

確かに、最初に目が合つたときは、睨まれたと思つてびくびくしてしまつたりもした。

しかし、今、隼先輩がどんなに険しい顔をしていよつと、怒つているのか、辛いのか、本当に睨んでいるのか、一目でわかる。

……やっぱり、もう半年以上も見てるからかな。

「でも、やっぱり今日みたいな方がかつこいいです。いつもかつこいいけど、今日はもつと」

軽い愚痴のような言い方で漏らした彼の細っぽい横顔を見ながら、そう言つた。

「そーゆー口とはサキに言つてやれ」

いちからも見ないで、隼先輩はまた、冷たいであろうその左手を私の頭に乗せた。

「ウソじゃないですよ？」

「……わかるてるよ」

その答えを聞いたとき、いつもより冷たい彼の態度が、どうしてなのか、少しそうしたよつた気がした。その瞳の奥の困ったような色を見つけたから。

「隼先輩、今日は『トーント』ですよ」

すっかり温めることを忘れて、冷えてしまつた自分の手で、彼の

手をもう一度握った。

少し驚いたように目配せをした隼先輩は、呆れた顔で肩をすくめた。

「だから

「たまにはいいじゃん、なんて気分でやつてるワケじゃないんです。隼先輩が素敵だから、一緒に歩きたいって、それじゃダメですか?」驚くでもなく、硬直した彼は、十秒くらいの間、まばたきもせず、私と目を合わせていた。

「困ったもんだ」

いつもくるくるとまわる彼の舌が、少しつまづいたみたいに、上手く言葉が出ていなくて。

「あまりサキや 僕たちを惑わせないでくれ」

しつかり手を握り直してくれた隼先輩は、その女性のように白い顔を少しだけ赤くしているように見えた。

「サキ先輩はあんなこと言つてましたけど……。へんなコトしなきや、私はいい、ですよ」

「ま、危ないのは梢とか……くらいうモンだろ。自分で安全つつたつて信用ならないか?」

すっかりいつもの調子に戻った隼先輩の言葉に、私は顔を上げると、彼は信じられないくらい陽気に笑っていた。

「すつごい大きなツリーですねっ」

連れられて来た大きなデパートで、吹き抜け状になつていてる中心部を何階にもわたつている大きなツリーが飾つていた。

「ああ、すごいな」

隼先輩は、あの後吹つ切れたのか、肩の力を抜いて、いつもよりもずっと優しく笑つていた。

「あっち行きましょっ」

ワクワクしてきた私は、隼先輩の手を引いて、スキップ気味で進んだ。

「たまにはいいですね。思いつきりワインデュッシュピングっていつのも」

「俺ははしゃぐお前を見るのが楽しかったよ」

「なんですかあー」

もうとっくに手は離してしまったけれど、着飾った男女が一人。周りから見れば、恋人にしか、見えない……よね？

「ウチの妹たちと買い物行つてもつまらないからな。如何せん一人で以心伝心しすぎて、ほとんど無言だ」

「じゃあ私、妹みたいなものだつたことですか？ 隼先輩がお兄ちゃん」

お兄ちゃん」と言つた途端に、彼は笑い出した。

「これ以上、手の焼ける妹はいらないな」

よほどおかしかったのか、笑いを堪えながら見下ろしていく隼先輩を、私は睨み返した。

「相変わらず、お前に睨まれてもかわいいと思つだけだな」

「……え？」

「今……今、あの隼先輩が……」

「今、あの……」

「そのマヌケた顔もかわいいぞ」

全然彼のイメージなんかじゃなくて、ええと、甘い……に分類される感じのキーワードを発して、優しく、ちょっと意地悪っぽく笑う隼先輩は、まさに別人で。

「そんなに驚くことか？ 今まで、サキが少なからず影響を受けるのはわかつていたから、言わなかつただけなんだがな」

急に、隼先輩が男らしく見えて、といいますか、ええと、ともかく私の心拍数が激しい上昇を始めて、今度は私が硬直する番だつた。そんな私の心情を知つてか知らずか、彼は手を差し伸べて、紳士的に微笑んだ。

「さ、桃歌。少し休もうか？ 連れて行きたいカフェがあるんだ。

お前、口コト好きだね?」「

「口コト……。はい!」

今は胃袋だけじゃなくて、心もしつかりつかまれてしまつています。

「おい、桃歌。さつきからどうした」

「……へつー? な、なんでもないですよ

「何がある、とこうか、何か喋れよ……」

デパートを出、隣に並んで歩く隼先輩を、どうしてかすごく意識してしまって、落ち着くことができなかつた。

特別、何か変わつたというわけでもないのに、先ほど彼の態度が、衝撃的で。

「お前さあ、部員のほとんど尋常じゃないレベルで好かれてる」とくらいい、わかつてゐるだろ

「それは……薄々」

合宿の時に和真君に言われて、初めて考えたことだつた。確かにヒップホップ部の部員たちは、誰しもに優しいワケじゃない人もいるけど、みんな私には優しくしてくれる。

でも、私は、みんなの気持ちには応えられないし……。

「それでも桃歌の相手がサキであることに不満を抱いているヤツはいないんだ。だから、お前とデートしたいとか、そういうコトを思うのはこっちのエゴだ。応えられないと思つてるかもしれないが、みんな、十分満足だ」

物わかりの悪い、泣き虫な子供をなだめるよつて、彼は淡々と述べた。

そうだ、そなんだ。私は涙を流すことさせずとも、「でも」を繰り返して、相手に答えを探してもらう、子供なんだ。

「私……。サキ先輩の気持ちに一番応えたいって思うんですけど、でも部員のみんなが好いてくれるなら、みんなの気持ちにも応えたいんです。サキ先輩が一番なのは、やっぱり私自身がサキ先輩を一

一番好きたって思つてゐるからで、けど、みんなにとつて、私は「

一つでも隠したら、その「What」を問うことになるから。私は、全て思つてゐることを口に出さうとした。

だけど、その問いを最後まで言つことはできなかつた。

『私は、どのくらいの存在なんですか？』

答えを聞いたら、搖らいでしまつ、その一つの問い合わせ。聞くことなんてできなかつた。薄々、そう、薄々気づいているから。

「お前の言いたいコトはわかる。だから黙つて聞け」

口をつぐんでしまつた私に助け船を出して、彼は自らそこに乗り込んだ。導くは、安全な岸まで。頼りがいのあるおおらかで優しい彼らしい、ぶつかりぼうな言葉だつた。

「まずひとつ。たくさんやりたいコトがあるなら、その中で優先順位があるのは当たり前で、そしてもしも切り捨てなければならないことがあるなら、優先順位の低いものから切り捨てるだろ？。お前が直感でやりたいことをやればいい。二つ目。さつきも言つた通り、お前について一人で勝手に悩んでるヤツもいるが、お前がどうであらうと、そいつらは不満はない。俺がこうして隣にいるからといって、サキのことを考へるなどは言わないだろ？。三つ目。桃歌の存在自分がみんなにとって重要なんだ。……だから。お前が一番好きなサキのことを考へてくれ。桃歌が自分のやりたいことを優先できないなら、サキのことを考へてくれ」

すたすたと歩きながらたくさんのことを見、これまたすたすたと早歩きで口にしていく彼に、置いていかれないようにする。そのくらい、何を思つてか、私のことなんて気にしてないみたいな歩きだつた。

だけど……彼の言葉は、私を本当に優先してくれるもので。もし、隼先輩の言つことが部員みんなに共通するならば、私がこんな風に悩んでいるのも、みんなにとつて良いことではないだろ？。

「こんなもんで納得できたか？ お前がサキを好きで、サキがお前を好きであるかぎり、少なくとも俺はこの考えを変えない

隼先輩が立ち止まって振り返った背後は、小さなカフェの軒先だった。

「……はい」

彼は色々なことを、ちゃんと理解して上手に話すけれど、先ほどからの話の内容はずつと、とにかく私を安心させて、説得しようとするようなものだった。

「隼先輩、ありがとうございます」

情けない自分も何もかも笑えてきて、笑顔を向けると、彼もまた満足そうに笑つた。

隼先輩が再度振り返つてドアを引くと、ドアについたベルが、かわいらしい音を立てた。

「おや。いらっしゃい……彼女さん、じゃないか」

入つてすぐ、狭い店内のカウンターの向こうに座つている青年が、隼先輩に声をかけた。

車椅子？

「サキの彼女だよ」

さつぱりとして印象の彼は、柔らかな笑みを浮かべて、納得したように頷いた。

「なるほどね。……それで？」

「オレはコーヒーで。こいつにはココアを

「かしこまりましたと」

少し水瀬先輩と似たような、飄々とした感じ、けれど優しい雰囲気と丁寧な仕草に、紳士的な印象も受けれる。

最初に違和感を覚えたとおり、これまた狭いカウンターの向こうで彼は車椅子を少しだけ動かしながら移動をしていた。

私の荷物やらを受け取つて席を促す隼先輩に従いながら、その珍しい光景に釘付けになつた。

てきぱきと動く手先を見ていると、隼先輩が料理を作つているときのことを思い出す。

「そんな見られても、照れはしないけど、少し申し訳なくなるな、

サキに。……どうぞ、お嬢さん」

大人びた、というか大人の微笑みでカップを差し出した彼に、どきどきしてしまった。

初めて直視したその瞳は、甘い色を持つていた。
あたたかいカップの湯気^ヒに、彼の顔を隅から隅まで見つめてしまう。

「……それ、飲み物だからさ。飲んでほしいな」

「へ？ あ、は、はい」

見とれてたのかなと思うと恥ずかしくて、手元に俯いて息を吹きかける。

「あ……おいしい」

カラカラな身体に、温かくて甘いココアがじんわりとしみる。
思わず呟いた感想に、カウンターの向こうの彼が微笑んだ。

「どうも。それで、隼。こんな日に何か相談でも？」

「ああ。そこのお姫さまが、ちょっとね」

隼先輩にぴったりな真っ黒のコーヒーのカップを指で遊びながら、
彼は私を向いた。

「え？」

先ほど解決したような気がしたのだけれど、まだ……。

「お嬢さん、サキのこと、好きなんでしょう？」

「……はい」

彼がサキ先輩のことをどれだけ知っているかわからなかつたけれど、隼先輩と親しそうにしているところを見ると、おそらくそれなりには親密な関係なのだろう。

「じゃ、隼のことは好き？」

少しばかり衝撃的な問いに、私は後夜祭でのことを思い出した。

『……嬉しかったよ』

様々な理由もあれど、私は、隼先輩を好き、と言つた。そして、
その理由の全てを彼に打ち明けてはいない。

「……はい」

おずおずと頷くと、彼はにっこりと笑った。

「その迷いこそが、愛情の差つてものだよ。形式的なものだらうと、きっとキラの行動は全て、今みたいにサキを優先するだらう」

「あ……」

そつか。そうだ。私はサキ先輩への想いには、迷わなかつた。隼先輩に対しては、少なからず他のことを考えて、遮られてしまつた。「そういうワケだ。それでもって、お前はそれでいい」

コーヒーを飲み干した隼先輩は、安心したように温かく笑つた。

「Jの後、どうする？ 行きたいところとかあるか？」

「えつと……。あの、プレゼント、一緒に選んでもらおうかなあと思つて」

彼はおかわりを受け取りながら、了解と頷いた。

ちょうどいい温かさになつたココアは、すつきりした心に、また少し違つたのにしみこんでいった。

「うーん……。隼先輩なら、どんなものをもらつたら嬉しいですか？」

「俺は……。俺は相手が気に入ったものなら、何でも。だが、サキはわかりやすい方が好きだらうな」

こじやれたアクセサリーショップの、なんとも言えない空氣に緊張しながら、こつそりと隼先輩に声をかける。

「わかりやすいって……」

「ペアものとか。ああ、勿論お前の場合は、な

少し奮発していいものを買おうと、たくさん貯金をしていたから、常識の範囲内なら大体買えるくらいの額は持つている。

「なるほど」

田の前にずらりと並ぶネックレスを眺める。思わず田を細めて見たくなるくらいにキラキラと輝いている。

一つで一つになる、対になる、ほとんど同じデザイン……自分で買ったことももらったこともないから、どんなものがいいのか全く

見当もつかない。

「ペアは、さ……。」一つともあげて、一つサキから贈つてもいいつぶうにするとか

「そ、そうですね……」

そんなこと、私にできるだらうか……。

「それ、気に入つたならいいんぢやないか?」

つい手にとつてじつと見つめていた一つ。すぐペインときて、運命的な出会いみたいな感覚を覚えた。

「いいと思いますか?」

「俺個人の感覚としてはいいと思う。それで桃歌が気に入つたならいいぢやないか」

頷いて、緊張で力クカクしながらレジへ向かう。
これで、もう全部安心……かな。

「あと三十分で抜けられるそつです」

「意外と早かつたな」

日も落ち始め、いよいよ恋人たちの時間、といつた雰囲気になりつつある商店街をぶらぶらと歩いていたら、サキ先輩からメールが届いた。

サンタ服の凧咲さんの写真を添付してくれて、とってもかわいい彼女に、これは売れるなあ、と思つたりして。

「じゃ、そろそろサキのところへ行くか」

「はい。……隼先輩、今日はありがとうございました」

ひとつそり買っておいたお礼を、横を歩く彼の「トー」にそつと押し付けた。

少しの間気がつかなかつた彼は、私の手元と顔を何度か見て、また呆れたように笑つた。

「……全く。そういうのいいんだつて。

ければならなくなるだろ?」

そして、驚いたことに、小包を持っていた私の手をそつとつかん

で、肩に腕をまわした。

「サキには秘密な」

そう耳元に囁いて、顔を近づけてきた。

「あの……っ」

熱い吐息がくすぐつたくて、それ以前に、良いのか悪いのか判断しかねて、私は顔を背けようとした。

しかし、ぱつと目が合つた彼の深い深い黒の瞳に吸い込まれるようにして、動くことができなくなってしまった。

頬に軽く触れて、隼先輩は身を離した。

「はは。……俺には無理だな」

「え？ と……はい？」

どきどきがおさまらないくて、私は真っ赤な顔のまま首を傾げた。
「お前とサキとの間に割つて入ろうだなんて、考えられもしないってコト。 ありがとな。今日は俺も楽しかった」

綺麗で、優しい笑み。見下すようなものじゃなく、色々な辛みをもぐるんだ優しい笑み。

彼を知らない人は、あざとい、とも言ひかもしれない。こんな場面で、そんな表情を浮かべるなんて。

だけど、彼にとつて、普段のひんやりとした笑みと、今の笑みの違いは物凄く大きいもので……きっと、それを私に見せてくれるということは、彼は私に心を許してくれているってことだ。

なんだか、ちょっと動物みたいだな、なんて思った。何でも器用にこなすし、間違つたことは言わないし、とても完璧に見えるのに、そういうところが少しかわいらしさを感じる。

……こんな風に見ちやう私も、彼の妹っていう立場にはなれないなって、思つ。

X - mas2011 - 水瀬「抱えた秘密の重み」（前書き）

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
『承の上お読みください。』

この話は、B10ss0m番外編「X - mas2011 - プロロー
グ」から繋がっています。

B10ss0m番外編「X - mas2011 - 集『兄じやなぐれ』」
とはパラレルワールドです。

「っしゃーー！」

「…………」

「な、何だよ」

「いやー水瀬はあんま信用されてないからなー」

「基山ちゃんはそんなこと思ってないよね？」

「えーっと…………」

綺麗なカーブを描く下のまぶた越しに見つめられて、少しウ、と押し負ける。

「安心してくれって。俺は女の子が好きだけど、人一倍大事にもするからサ」

「もしもし?」

「もしもし。基山ちゃん、ちょっと予定変更」

水瀬先輩が、改めて待ち合わせ場所に定めたのは、私一人ではとつても行けないような繁華街の駅だった。

「じゃ、ホームのどつかにいるから」

降りるはずだった駅を通り過ぎ、そのままその駅へと向かった。

水瀬先輩と…………少しだけ、不安もあった。

だって、じやんけんに参加した人の中では、一番、いわゆる「チヤラい」人だったから。

いつも朝は一緒に登校したりするし、信頼していないワケでもないけど、彼は掴みどころがなくて、何をするかわからないのもまた事実だった。

隼先輩も多分大丈夫だろ、と言つてくれたけど、不安が残るのは仕方なかつた。

電車を降りて、階段へ向かう人波に飲まれないように、どうにかホームに残る。

キョロキョロしながら先輩の姿を探すと、ふいに肩に感触を感じた。

「おはよーわん」

「あ、おはよーりやわいします」

いきなり肩を抱かれて、急に上がった体温と心拍数でも、冷静に挨拶ができる自分に驚く。

せっぱりいつもの調子とは少し違つた。だつて、いつもは別にこんなこと毎朝してくるほどもないから……。

「はは、早エーゼ? ドキドキすんのはまだこれから」

完璧に決めてくる水瀬先輩の瞳から逃げることはできなくつて、私はまさにへビに睨まれたカエルの状態だった。

そんな私を見て、とりあえず身体を離したが、その手は私の右手を探つて指を絡めてきた。

「あ、あのっ!」

「今日のテーマな、『擬似彼女体験』。恋人同士の『デートで手、繫ぐのは基本中の基本だ。だろ?』

「でも

サキ先輩に、ダメつて言われてるし……。

それに、今日のテーマつて、勝手に決められているけども。

「はーいはーい。俺さ、既に基山チャンと手繫ぐだけじゃなくて色々してるだろ? それに今田は、この後のサキのために色々教えてやろううと思つて」

私の相談に乗ってくれるときの優しい目で、水瀬先輩は笑つた。色々して……ない口トは、なにけど。

「サキ先輩に全部言つちゃいますよつ」

水瀬先輩には、一番使える脅しだと思つて口にしたのだが、それに対して彼は鼻で笑つた。

「俺にファーストキス奪われちゃつたのも、『デートに行かせりやつたのも、サキなのになー?』

「だつてそれは水瀬先輩がつ」

むすつとして反論した私の鼻先を、彼はその長い指でつついた。

「だーかーら。それをただの『ワルイコト』だと思うか、反省して次に生かすような経験だと思うか。で、基山チヤンが今後俺みたいなのに引っかかるないようにってコト」

でも、水瀬先輩は、別に悪い人ではないだろうに。今まで、私が嫌だ、と言葉で否定したことは何一つやろうとはしなかつた。

「サキにとつてはキミが正解だろ。だから、基山チヤンの間違いを正しちゃくれない。だけど、それは隼はやつてくれる。それで、俺ははー」

まだ眉間にしわを寄せて黙り込んでいる私に、懲りなく笑いかけて、彼は私の耳元で囁いた。

「キミに、夢を見せてあげる」

びくっと肩が震えた。驚くほどに色っぽい声でそう言つた水瀬先輩が耳元から遠ざかるのを感じて、私はぱっと耳に手をやつた。

「あの……。嬉しく、なくはないんですけど、でも私、サキ先輩に申し訳なくつて」

勿論、カツコイイ水瀬先輩と仲良くすることが嫌なワケではなかつた。彼の単純ではない素敵などこなはわかっているつもりで、彼に裏切られたことといえばただの一度だけだった。

「サキの縛る範囲だけで生きていけるほど、女の子は健気なモンでもないつしょ。こうして今、サキと基山チヤンが一緒にいないのは、色々あれどアイツのせいだし」

まだ反論の余地はあつたけれど、彼は黙つて目尻を下げて微笑み、私の手を引いた。

「俺だって女の子に不自由しないってワケじゃないんだから」

「……えつと?」

「こーんなカワイイ女の子とデートできて純粹に嬉しいってコト。俺のためにも、今だけはサキのこと、忘れようぜ?」

突拍子もないことを言い出した水瀬先輩についていけなくて、私はぽかんとしてしまつた。それでも、言葉一つ一つから繰り出され

る押しは、だんだん強くなつていて。

……甘えて、いいかな？ サキ先輩との約束、破つても。

「桃歌、おいで」

穏やかに笑つて、初めて私の名前を呼んだ水瀬先輩に向かつて、自然と足が進んだ。

それは魔法みたいな一瞬だった。

「結構歩いてるだけでも面白いだろ？ ああ、一人だと確かに心細いかもな。人、たくさんいるから」

「そうですね。でも、だからこそ来られる良い機会になりました」ときどき、水瀬先輩が視線を受けているのを感じながら、私はすっかり彼との恋人繋ぎにも慣れてしまつて、見慣れない人ごみと町並みに心を躍らせていた。

なんだかんだ彼が親切でやつてくれているとわかっていた。あれこれ考えずに楽しむ方が自分にも水瀬先輩にも良いことかなあって。「なあ、俺がいつも『基山チャン』って呼んでる理由……あと、隼の『チビ』もかな、知ってる？」

「……なんでですか？」

そういうえば、部員は割とみんなそれぞれ色々な呼び方で私を呼ぶ。「サキがな、最初の頃は名前呼んだだけで怒つたんだよ。琴みたいに変なあだ名つけるワケにもいかないし、まあそんなワケで考えた結果つてゆーコト」

「そ、そなんですか……」

思つてみれば、最初の頃はサキ先輩はすぐ過激だった。最近はある程度なら全然怒つたりしないし、その辺りのことで私が困るということもなくて、常識的に近づきつつあつた。

「まあ慣れちゃつたしな。でも、桃歌つて名前、嫌いじゃないぜ」

「私も……水瀬先輩の名前、好きです」

女の子みたいに綺麗な響きで。他の誰とも似つかないような名前が、彼にふさわしいと思っていた。

乾いた笑い声を立てて、彼は私の身体をぐつと引き寄せた。

「そー やつてお返しでも褒めたりすると、調子に乗って、じり、ぱくっとやられちまうぜ?」

顎に指をかけて、口の前で噛み付くフリをしてみせた水瀬先輩の仕草に、かなりドキドキしてしまった。キス、されるかと思つて。

「あと。そのビックリ顔もむすっと顔も抱きしめたくなるからむやみにしない」

ドキドキというかドギマギに対応するのに必死で、目の前の彼をどこともなく見つめていて、全然神経の通つていらない私の頬をつきながら、水瀬先輩は余裕たっぷりに笑つた。

「あ、な、からかわないでくださいよ!」

往来のど真ん中だったことを思い出して急に恥ずかしくなった私は、左手は前に押し出して、顔を背けた。

「考えなしに両手を出すと」

そのまま左手はどこにも届かなくて、水瀬先輩の手にまとめて掴まれた。

「ほら、もう俺のモンだ」

「…………」

本気だつたら、勿論、迷わず梢君にしたことをする。

でも、彼の場合そんなことないんだけど、どうにかしてこの場からなんとか抜け出しあつた。

あれやこれやと思考していると、水瀬先輩は笑つて手を離して頭を撫でた。

「はいはい。今、泣きそうな顔してるわ。……んーと、キミに対しても少しでも愛情があるヤツなら、泣いたら少なくともひょっとは法む、かな」

水瀬先輩はちゃんと私のこと気にかけながらこうすることを今じてるつてわかつてゐけど、やつぱり、ちょっと怖いし、ちょっと遊ばれた感じがして、嫌な気持ちだつた。
泣きたくなんか、ないけど……。

「……あれ？」

何ともいえない気分でうつむいた私を見て、水瀬先輩は少しの間黙っていた。そして、再度私の右手に左手を絡めて手を引いた。

「わかったよ。お姫-sama、暖かいところでちょっと話そうか」呆れた風なんかじやなくて、柔らかな彼の口調を全然、聞く気なんてなさそうな態度の私に、それでも彼は優しく促してくれた。きっと、素敵すぎる笑顔と共に。

へそを曲げて、親に引きずられる子供みたいに、私は口を結んで彼についていく。

だつて、何を言えばいいのかわからない。泣けって言ひの？、「とか、どうすればいいのか、とか、どうしてか非難の言葉ばかり出てきて。

黙つて私の手を引く水瀬先輩は、こいつやって機嫌を直すのもお手のものなんだろ。だって、水瀬先輩だから。

もやもや考えながら、いつの間にか私は彼と向き合つて、ケーキ屋さんの椅子に座つていた。

「あの……」

どうしてこうなつた、と言わざるを得ないのは、あんまりにも私がぼうつとしていたからだ。

「こじやれた店内で、こじやれた音楽が流れ、目の前には水瀬先輩。

「ちょっと話そう、つて言つただろ？」さつきは、「ゴメンな」

肘をつき、目を細めていた体勢から、しつかり背筋を伸ばして座りなおした。

「うん、ちょっとばかし、桃歌のプライドを傷つけたかなと思つ」

当たり前のようになに私を呼び捨てにする水瀬先輩に違和感を覚えて、プライドなんて……とまた自分の思考に沈んでいきそうになる。

「忘れてたわけじやない。梢に脅されてキミかけ泣いたこと、葉山先輩に散々オモチャみたいに遊ばれて嫌な気分を味わつたこと。むしろ、忘れていてほしかったくらいだった。でも、そんなワケ、ないよな。」

なあ、今まで自分が傷ついたことを全部認めて、覚

えていいのか？ 辛くないって思うのは強さかもしれないが、弱さを認められない弱さもある。そして、思いがけない場面で、否定もできないような衝撃を受けたときに、混乱して崩れてしまう

最初は静かに淡々と語つていたが、何かを思い出しているのか、後半は朗々と文章を読む役者のように、重たく厳しい言葉だった。

彼は……どんな経験をして、そんなことを思うの？

いつもの明るい笑顔の裏には、やっぱの重たい事実を隠しているような気がして、私は自分自身に投げかけられた言葉よりも、水瀬先輩のことが気になってしまった。

だけど、この場を与えてくれたのなら。

「正直に言つても、いいんですか？」

私が忘れられない、傷。今でもずっと、気にしてしまう口ト。

彼は長い睫毛で少し瞳をふさいで、それでも優しく微笑んで頷いた。

「水瀬先輩がファーストキスでした。でも、そのすぐ後に先輩が他の人とキス、してるの見ちゃつて……。あの、理由が知りたくて」
あのときは少なからず何かを期待してはいたかもしれないけど、今となつては、彼がどうして頼んでもいないのに私にキスをしたのか。それが知りたいだけだった。

目の前の彼は、何とも言えない表情でひとつ溜め息をついた。

「それ、か……。それに関しては……えーっと、機会がなくて謝れなかつたけど、ホントにごめんなさい」

『あの』水瀬先輩が、手を合わせて、頭を下げた。
それに、言葉に詰まつていて。

「？……はい」

「理由は言えないけど、とにかくごめんなさい。完全に俺のせいだ。桃歌はサキからかばつてくれたけど……」

『冗談みたいに素直に謝った彼に、正直戸惑つた。そんなことよりも、だって、理由が知りたくて……。』

『あの、どうしてですか？』

謝らなくていいの」と首を傾げながら問つと、彼は肩をすくめた。

「言つたらもつと傷つくなつと思つ。し、俺には言つ権利はない、カナ

……

「権利？ サキ先輩が関わつてゐるなら、私が保障します」
個人的なことで言いたくないなら追及はしないけれど、だつて、
彼は多分私に気を遣つてそんな風に言つてゐる。

「もう知らないぜ」

少し熱くなつて食い下がる私に、彼はもう一度溜め息をついた。
「その……。怒ると思つけど、正直に言つと、『したかったからし
た』」

「…………」

「で、なんか勘違いされてたみたいだけど、前後はあれど付き合つ
たコトある子以外とはキスしたことない。 桃歌？」

わ、たし……。どうしたんだろう。水瀬先輩の動機を聞いて、本
当は、すぱっと諦めたかったのに。

「つむぐことは、なんとなく悔しかつたからしなかつた。けれど、
机の上に置いた拳を、爪が食い込むくらい強く握り締めていた。

「……続けてください」

「キミの中学校時代の話を聞いて、そのときの桃歌とサキと色々考え
てたら、急に、ね……。こんなこと言いたくないけど、桃歌に引き
ずらせることになるならしなきやよかつたとも思つて後悔してゐる」

「じゃあなんでしたんですかっ」

後悔してくれなくたつていい。私は別に、彼とキスしたこと自体
が嫌だったとは一言も言つていないもの。

「なんだろーね、俺……。サキにやりたくなかったのかもな。少し
だけ悔しかつたし、サキを応援しようとも思つていたけど、キミみ
たいな女の子は珍しかつたしな。どうこう反応するのか、ちょっと
気になつてた」

気がつくと、水瀬先輩は見たこともないほど真顔で、どこにも偽つ

でいない声色だった。

「……最低ですね」

「自分でもそう思つ。打ち明けたからには、俺は桃歌に何でも償つよ」

私が、一番辛かつたのは。

彼が私のことを弄んでたんじやないかってこと。私は他の女の子と全く変わらないんじやないということ。……でも、これらは、ほとんど否定された。

私に水瀬先輩を許す義務はなくつて。だけど、私は彼のことが嫌いじゃないから、すつきりしてまたいつものように話しかけていたかった。

「さつきのは……。水瀬先輩は、好きな子としかキスしたことないつてこと……ですよね」

「ああ。何？ 桃歌、サキだけじゃなくて俺の愛情も欲しいのか？」

いきなりふざけだした彼にちょっと怒りを覚えて睨みつけると、笑つて誤魔化した。

「……甘えてもいいですか？……忘れないんです。重たいあの日のファーストキスも、水瀬先輩が他の子とキスしてた場面も」何を言つているのかわからなくなつて。私は、水瀬先輩といふとき、ときたま、こんな風にサキ先輩に感じるのとは違うドキドキを感じる。胸が、苦しい。

「……機嫌直してくれたつてコト？」

「わ、たし……。正直に言つとあの時は、先輩に期待してました。だって、初めてのことだったから……」

こういう言葉で弁解をしたら、彼の性格なら、どんな状況でも慰めてくれるつて半分くらいはわかつてた。だけど、ちゃんと彼は私の頭を撫でて優しく笑つた。

「わかつたわかつた。桃歌が素直に全部言つてくれたの嬉しかつた。俺も……なんだ、その。余裕ありげな演技で困らせて、『ゴメンね』

「え……？」

演、技。確かに、そういういえば先ほどの中だと、あの時の彼の態度とは矛盾するようにも思える。

文化祭の演劇でもとんでもない演技力を見せ付けられたり、彼の冗談はたまに冗談とは思えないこともある。だけど……。

「そ、演技。バレてなかつたからあんまり言いたくないけど、よく演技で誤魔化してたから、そこんトコ、気をつけてね」

「え、えええ……」

「……ん？ 『』といふことは、演技が余裕ありげなら、本当に余裕がなかつたの……？」

「俺な、たまーに本気でキミをどうにかしたくなるんだよね。どうしてか、ね」

そういう風に言つ水瀬先輩は、なんだか……。穏やかで、子供を見守るようなまなざし。よく見ると、頬が少し赤いような。

「今まで言つたよ。…………わかるから。俺、他の奴らと一緒に桃歌にちょっと惚れちました。 キミが良ければ、さ。あの時のことなんて全部忘れるくらい、今日は楽しませてあげるから」「え……」

私も、多分真っ赤だった。だつて……一番ありえない人に言われてしまつた。

水瀬先輩、最初の頃、一番私に冷たかつたのに。

「からかつたとき、桃歌が赤くなつて怒るのを見るのが楽しいんだよね。余裕ないクセに、必死に色々考えてどうにかしようとするのが、天敵につかまつた時のウサギみたいでさ。…………ま、そんなワケで。今俺はサキに立ち向かおうとは思えないけど、かなり桃歌の方だぜ？だから、嫌なヤツにつかまつたりなんかしないよーにレクチャーする。OK？」

少しだけの間をおいて、私はゆっくりと頷いた。なんだつて……

私はドキドキしてたから。

「まあそんなワケで、『』はケーキ屋だ。とりあえず何か食べよう

か

「ふふふ」

おいしいケーキにおいしい紅茶、そして水瀬先輩とのじがらみがほとんどなくなつたことによつて、私は笑みを隠せない気分だつた。

「変な顔。ニヤけてんぞ」

右手はしつかり指と指を絡めてつないでいる。さつきまで何を考えているのか全然わからなくて、甘えすぎても申し訳ないとthoughtいたのだけれど、私は彼のことが少しわかつたような気がした。

言葉は素直だけど、ちょっとぶっきらぼうなのは他の人と変わらない。

「本心じゃないつてわかつてるから、傷つきませんよ?」

「参つたな……。桃歌、機嫌が良いか悪いと、かなり悪女になるよな」

呆れながらも微笑む彼は、ちょっと今までの水瀬先輩とは違つて見えた。

「……水瀬先輩つてホントは、全然軽い人なんかじゃないですよね」「どーだらうね。ま、女の子は大事にするよ? 師匠の教えだからな」

「ううん。はぐらかされてる。だけど彼はまたちょっとずつ自分のことを口にしたりもする。

「師匠つてなんなんですか?」

「俺の過去、気になつちやう? あんま話したくないから話さないけどね」

いつもの飄々とした態度に戻つてしまつたけれど、ビシとなく彼もいつもより機嫌が良さそうに見えた。

「それより、あそこで何かやつてるのか?」

水瀬先輩の指す方向を見ると、交差点の脇の広場に一際人が集まつていた。

「わっ……

やはり人の注目を集めることの方に向かって流れてい、背の高くな
い私はすり抜けようとすると人につられて向こうへ流れそうになっ
た。

しかし、ぐつと強い力で腕を引かれて、柔らかいコートにボフ、
と当たった。

「危ない危ない。……なんだろうな？」

水瀬先輩には何てこともないのかもしけなかつたけれど、引き寄
せて守つてくれたことにドキドキした。しかも、今の状況は、私の
背中まで彼が腕を回して、抱きとめられている体勢で。

「……ん？ あれ」

真つ赤な顔を見られないように努力したけれど、彼に額をすっと
押されて顔を上げると、きょとんとしている彼と目が合つてしまつ
た。

途端に口端が弧を描き、目が細められた。

「ホント、面白いな。……今、何考えてる？」

水瀬先輩には、じうじうとき私が脳みそフル回転でじうでも良い
事を考えているのがバレているんだつた。

「み、水瀬先輩の、コト……」

素直に言つてから後悔した。にやけていた彼が、もつと意地悪そ
うに笑つたから。

「今の台詞、サキが聞いたら、俺の命が危ないな。ま、サキと歩い
てもどりせ部活のこととかも考えてるんだろ。桃歌つて案外、
頭は回るよな。他の子みたいに目の前のコトでいっぴいっぴいに
ならないから、なんか難しい」

「十分にいっぴいっぴいですよ」

彼の言葉一つ一つが気になつてしまつほどには。別に関係ないけ
ど、今まで水瀬先輩がどんな子と付き合つてたのか、とか……。

「ふーん……？ で、あれ、なんなんだうね」

疑いの眼差し、というより、多分わかつてからかつてるんだろう
うけど、彼はそんな態度をとつて、しかし私を抱きしめたまま、再

度先ほど指差した方向に向いた。

人ごみに隠れてて私には全然何も見えなかつたけれど、彼は何か見えているようで、口を結んで目を細めた。

「んー……こんな日に、なんか撮影してるっぽい。こんな人に集まつてちや、迷惑だろーに」

認識した途端、興味をなくしたように声のトーンを落とした。

そして、私も少し向こうを見ようと努力していると、ふと彼が咳きを落とした。

「……桃歌つてテレビ見る？」

「えーっと……あんまり」

正直に言つと、家では何もしないでぼーっとしている方だつた。

勿論、部活や勉強のことはそれなりにこなしてから、だが。

「そつか。俺、実は子役やつてたんだよ」

「え？」

唐突な問いに、唐突な話題だつたが、彼から、じついう風に意外な過去とかを話してくれるのは初めてだつたように思つた。

「ちょっとだけだけだね。やりたいコトできたからやめちゃつた」

茶目つ氣を含ませて、彼はウインクをした。

さつき言つてたみたいに……演技しちゃうクセとか、そういうところから始まつてたんだろうか。

「やりたいコトつて、やつぱり……」

「ダンスは高校からだ。中学生の頃までは歌手になりたかつた」
急に、彼がとても子供みたいに見えた。悪い意味じゃなくつて、夢見る少年のような。今まで、そういうところは全然見せていなかつたから。

「そつか。だから歌があんなに上手なんだ。

「でももう、諦めたつていうか、ホントに音楽好きな人には勝てないなーつて思つたら、趣味だつてコトに気がついてさ。今はもう何にもない」

その言葉にウソはなさそうだったのだけれど、ちょっとだけ心に

引っかかるところがあった。

後夜祭で、歌とダンスでステージに上ったのは、まだやりたいって気持ちがあつたからじゃないのかな？

「それでも、水瀬先輩は人前で何かするのが好きそうですよ」

「……そう見える？ そつか。諦めきれてないのかもな」

部活のときだってそうだった。パフォーマンスといつも在一起して、彼は一步も引かないところがあった。

珍しく、少しだけ悩んでいる感じの表情を見せた水瀬先輩は、やつと私の手を引いて、人ごみから抜けた。

「ま、そういうのを目指したくなつていうワケじゃないんだけじゃ。なんというか、そんなに強く決意できないんだよね」

私が見れば、彼は割と何でもそつなくこなすし、世渡りも上手だから、今からでも芸能人にはなれそうなものなんだけれど。

「私は、何か、行動を起こしてからホントの気持ちになるつてこともあります」

言つてから、気がついた。サキ先輩と私の関係と……同じ？

水瀬先輩もそのことに気がついたのか、私を見て笑つた。

「……そうだな。それを言つたのは俺、だしな。モヤモヤしてるだけ、時間は無駄だつてもんだ」

自嘲なのか、私を少しだけ揶揄しているのか、しつかり目を合わせておかしそうに微笑んでいた。

「そんなワケで、今、俺が桃歌と一緒にいるのに、自分の口トばっか話してるのはあんまり効率の良い話じゃないな！ さて、寒いしどつか入ろうか」

さつき演技がどうとか話していたのがウソみたいに、彼は素直に気持ちを表現しているように見えた。

最初に会つたときよりも、ずっと、彼は私に心を許してくれている気がする。

今思えば、一番自分を保護している殻が堅いのは水瀬先輩だったかもしない。

「さつきの続き。サキにアプローチするなら、手だけじゃなくもつと近づいてもいいと思うぜ。モーアイシはさらにつづコンだから、何やつても許されそうだし」

そう言って腕ごと絡めてきたのは水瀬先輩で、それこそ許されないんじやないか、なんて思つた。

でも私は、彼が私のために行動してくれてるって確信が持てたら。

ホントは心臓に悪いからちょっと嫌だけど、完全に抜むことをできそうになかった。

「そーいえば、海の帰りに桃歌、俺に引つつてきたよな?」

「……へつ!? そ、そういえば」

あのときはちよつとばかりはしゃいで興奮してたから、その……

微妙に我を忘れていた、というか。

「あーゆーの、あざとく覚えてる俺みたいなのに気をつけなよ。……ま、梢とかは多分自分がしたことしか覚えてないから大丈夫だろ?」「うう」

どうこう基準の判断なのだろうか。それに、梢君はきっと私がした酷いことを忘れているということはないだろう。

「本人が忘れた場合、切り札になり得るんだよ。お前、あの時こんなことしただろーとか。話に脚色したってバレないし。責任を追及するワケじゃないってさ、一線を無理やり越えさせるどこか」

「は、はあ」

……だから、私はあなたと腕を組んでこことにはなりませんよ。「そ。だからさつきの俺の過去の話とかわ……。秘密にしてるマト、あんまり興味本位で聞くと、戻れなくなるよ~」

水瀬先輩は、ミステリアスなキャラを演じているわけではないけれど、何だかんだ色々なことを秘密にする。

よく、それっぽいウソについて本当のことを隠したりするし、はぐらかすし。

でもそれつてもしかしたら、その責任の重さを背負わせないよう

にするための気遣いなのかな、とも思った。

まだ彼についてわからないことは物凄く多いけれど、きっと、水瀬先輩は、上手く一人で様々な人を守っているのだと思った。

「……ま、桃歌もたまに使うよな、この手」

「あは、は」

思い当たる節がないワケではなかつた。好意を伝えられたことをいいことに、サキ先輩とのケンカに利用したりするし……。
「それでいいんだよ。サキのことはもつと困らせてやれ。アイツはホントにヘタレだから、もっと強くなんないといけねえと俺は思うよ」

水瀬先輩式の恋の駆け引き、か……。

余裕たっぷりの視線を向けて、彼は私の腕を引いた。

彼とのデートで得られることは、別に、ワンステップ上の体験というだけではなさそうだった。

千種 琴吹 history「追つかけ続けた背中」

中学一年生の夏、俺は最初の恋と、最初の失恋を経験した。

「ねえねえ千種君、朝斗先輩のアドレス教えてよお
「ゴメン！ それは止められてるんだよね～」

俺の出身中学校には、サキみたいなはずば抜けたイケメンはいなくて、何故か、とは当時は思つていなかつたんだけど、朝斗は物凄くモテていた。

朝斗は今は俺と同じくらいだけど、成長するのが早くてちょっと背が高くて、俺の学校ではすごくテニスコートが目立つところにあるんだけど、それでテニス部だった。今もそうだけど別段頭が悪いということもなくて、実際お兄ちゃんなんだけど、お兄ちゃんキャラで面倒見はいいし爽やかで、テニス部の女の子から人気は広まり、彼が中三になる頃には一つ下の俺の学年にまでそれは伝播していた。俺は今と大して変わんなくて、男の子とも女の子とも仲良くしてたから、よく女の子に朝斗のことを聞かれたりした。当時の幼稚な俺としては、それで女の子と話せるだけで、ちょっとした得をした気分だつたなー。

昼休みに、教室の外の廊下をふつと朝斗が通つたのをきっかけにするように、クラスの女の子が俺にお願いしてくれる。

「じゃあ好きな子とかいるのつ？」

「んー……。はつきりとは聞いてないけど、いふとは言つてないな

」

今日帰りに聞くか。そんな風に思つていた。

テニス部は夏明けまでは三年もやるし、部活があるなら一緒に帰つていた。今と同じで結構仲良くて、恋愛相談とかそのくらい突っ込んだ話も包み隠さず一人で話したりしてた。

「そっかあ。ありがとう！」

そう言つてかわいい笑みを向けてくる女の子に、俺も思わずはにかむ。

朝斗　　当時はまだ朝兄つて呼んでたつて、はモテていいな。ずっとそう思つてた。

背の伸び方は全然違つたけれど、幸い顔や体型は似てゐるし、俺はいつしか朝兄を憧れにしてた。

そうそう、今物凄い大食いになつちまつたのも、早く背、伸びたいなーと思って、たくさんおかわりするようになつたのが始まりなんだよ。

今も朝兄には勝てないなーとは思つけど、当時の憧れようは半端じゃなかつた。

同じ床屋に行つて、同じ服を買つて、テニス部に俺も入つた。
テニスが結構上手い朝兄に追いつきたくて、俺も必死に練習した。
テニスは楽しかつたけど、結局朝兄を追つかけるのをやめたからもうやめてもいいくらいのものだつた。

さて、あんまり現在の俺が過去を語る、つて風に書くと、なかなか時間軸も混乱しやすいだろうから、俺の初恋と失恋に関わる数日間だけ、そのときの気持ちになつてみようかな。

「朝兄！　お疲れー！」

「おー、琴もお疲れ」

部活が終わつて、ラケットバッグを背負つた朝兄を見つけて、急いで駆け寄る。

いつも置いてかれはしないけど、結構俺のこと待つてはくれないんだよな。

「日イ、長くなつたな」

部活が終わつた後でもまだまだ高い太陽を見上げる。

夏が深まつて、いつとこいつとは、朝兄たち二年の引退も近いこと。うこと。

「来年お前が頑張れるくらい良い成績とつてやる」

俺が朝兄を目指して頑張つてることを知つて、彼はそんな風に冗談めかして言ひ。

俺にとつて、朝兄に追いつくこと、それにしか意味はないのにな。

「朝兄、あのや」

「なんだ？」

昼休みに、帰り聞こいつたことを問う。

笑つて首を振ると思つていた彼は、一瞬ビックリした顔をして、顔を赤くした。

「実は、いる」

「……マジかっ」

聞いた俺も驚いて、照れる朝兄と、何とも言えない気分で愕然としている俺との間に、微妙な空気が流れる。

「相手は？」

そ、そうだそうだ。これを聞くべきだ。

聞くと、彼は困ったような顔をして首を傾げた。

「知つてるかな。三年の、笠原 美佳つて子」

「……え」

俺は、その人のコトを知つていた。

明るくて、透明、って言葉が似合つくらいキラキラしていて、綺麗な女性。

去年同じ委員会になつて、実は今年も、だつた。

朝兄が、ミカ先輩のこと……。

「知つてんの？」

「ウン、委員会で仲良くしてもらつてる」

俺がミカ先輩と今年も同じ委員会だというのは、偶然なんかじゃなかつた。

次も同じ委員会をやる、と言つていた彼女を信じて、俺もまた同

じ委員会に立候補したまでだつた。

「まさか、お前が笠原のこと好きってことは」

「ないない！　ただ先輩として俺が懐いてるだけ」

……初めて、俺は朝兄にウソをついた。

多分バレてない。俺はいつしか、彼女が喜ぶようにといつも浮かべていた笑顔を浮かべていたから。

俺は、ミカ先輩のことが好きだつた。それも、初恋。いつ告白しようとか、早くどうにかしなきや、とか、考えるのが少し怖かつたのかもしれない。

でも、朝兄が彼女のことを好きで、彼女が朝兄のことを気に入るならば　いや、きっと気に入るだろう、俺はそれもいいと思った。

「つていうか、コレ、琴にも秘密にしてたよな、ゴメン」

兄弟の間で隠し事なし、つていうのは、暗黙の了解となつっていたから、朝兄は素直に謝つた。

だから俺はそんな、大好きな兄貴の照れ顔を責めることもできなかつたし、口をつぐんだ。

「琴吹君つてお兄ちゃんとそつくりだよね。あ、琴吹君の方がちょっとちっちゃいか」

「背、気にしてるんですよー？」

冗談めかして笑う彼女は、そう、ミカ先輩。

週に一度の委員会は黙つていてもやつてきて、俺は彼女と会わなくちゃいけなくなる。

それが嬉しいけれど、どこか苦しくもあつた。いつそのこと、朝兄が早く告白してくれれば、俺は恋人の弟として、それなりの立場にもなれたと思うのに。

「ねね、琴吹君さ、私の相談聞いてくれる？」

「なんですか？」

机に両肘をついて、その綺麗な両手で頬を包み込み、笑う。

ああ、どうしてこんなにも綺麗なんだね。こんなに綺麗なら、むしろ朝兄と同じくらい人気者ならよかつた。

「……今一応委員会中だから、この後、ちょっと残つてもらつてもいいかな?」

聖母のような微笑みを向けた彼女に、俺はこくりと頷いた。

「あのね、ちょっとと言いにくいんだけど……」

『私、千種君 朝斗君が、好きなの』

薄赤く頬を染めた彼女は、夏のギラギラとした太陽の下でも、みずみずしい美しさで。

そしてその様は、あの日の朝兄と重なつた。

俺の初恋は、自分から手を放すまでもなく、終わっていた。

「それでね、告白しようと思うんだけど……」

「絶対上手くいきます! だから早く告白した方がいいですよっ!」

俺は彼女の手をとつていた。自分で何が何だかわからなかつた。そしていつものように、彼女の喜ぶ笑顔を向ける。

きつと泣きそなことなんてバレない。朝兄にもバレない作り笑いを、この人が見破るはずない。

しかし、彼女はどうしてか戸惑つたような表情を見せた。

それを見て俺はいてもたつてもいられなくなり、適当に理由をつけてその場を去つてしまつた。

大好きな二人が幸せなら、初恋が失恋だつて、別に構いやしない。元から自分は楽観的な性格だと思っていたが、心は冷めているのが熱しているのか全くわからなかつた。

何故なら、頬は熱かつたのに、脳は冷静で、しかし言動はおかしかつたから。

それから一週間が経つて、また委員会がやつてきた。
色々と考えることはあつたけれど、俺の気持ちはあの日からどう

してか変わつていなかつた。

朝兄とはほぼ毎日話すけど、そういう話ももう一切していなかつたし、これ以上暗い気持ちになるまいとした。

俺はミ力先輩を見つけた途端、俺には何事もなかつた、むしろもつと応援しようと思つて、笑顔で駆け寄つた。

「ミ力先輩、こんにちは！」

「琴吹君。あのね、私……」

『一応委員会中だから、これで。明日の放課後ね、朝斗君に告白しようと思ってるの。テニス部オフでしょ？』

彼女はさつと手元にあつたメモにそう書いて俺に渡した。

俺の笑顔は、引きつつていなかつただろうか。

自分で応援する、と決意していながら、着々と近づく初恋の終わりに、俺は胸が引き裂けるような思いだつた。

『場所はどこにする予定ですか？』

『テニスコート裏』

テニスコート裏、か……。そこなら、オフの日は誰も寄らないし、テニスコートの側の並木のおかげで校舎からも見えない。

『頑張つてください』

特別綺麗とは言えない文字で、ひとしきりの戯言とも言える応援を書いて、俺はミ力先輩と目を合わせて笑つた。

もう、どうともなれ。

そのとき、自分の気持ちや何やら、投げ出してしまつたのが、俺の弱さだつた。

それなりに平穏な学校の中では、かなり突出している不良どもの集団が、何度も『テニスコート』と口にしてゐること。机に伏せて、俺は聞いていたんだ。

しかし、その単語で思い出すべきことに、俺は一時的に靄をかけていた。嫌だつた。経過なんて見たくなかった。三日後くらいまで寝

つて過ごして、幸せな状態の一人と、何事もなかつたかのように笑う自分。それだけが欲しかつた。

そして、ぼうっとしていたのもいけなかつた。最悪の場面に直面してしまつた俺にとって、何が正しいのか、わからなくなつた。

視界が歪むのは、夏の厳しい日差しのせいか、目前の信じがたい光景のせいか。

きっとどちらも、だらう。俺にとつてはその理由なんてどうでもいいことだつたけれど。

どうして俺は、部室に寄るうなんて思つてしまつたのだろう。そうだ、シユーズだ。朝兄がシユーズを忘れたと言つていたのを、働かない頭ながらに思い出してしまつたのだ。

それも、本当はウソなのかもしない。

夏の窓辺で少し眠つた俺の喉がカラカラだったのは当たり前だつたけれど、その時だけはそれが眠つたせいだとは思わなかつた。

「朝兄……」

テニスコートの側の、イチヨウの並木の作る日陰の下に倒れていたのは、ずっと俺が追いかけていた、兄貴。

先ほどからセミの鳴き声にかき消されている泣き声は、誰のものか。

わかつてはいた。この場所に来てしまつたときから。

ミ力先輩は、部室の扉の前にぺたんと座り込んで、俯いていた。部室の扉は乱暴に開けられていて、ラケットとボールが数個散乱している。

うつぶせに倒れる朝兄の肩に手を置いた。

そこで、俺は気がついてしまつた。俺の憧れは、途切れた。俺の憧れは、本当の正義にはなれなかつた。

いや、違う。俺が悪い。俺がミ力先輩や朝兄を止めれば、こんなことにならなかつた。

しかし、どうして止めなかつた……？ 朝兄ならば、大丈夫だと
思つたからか？

「うかもしれない、と、何故かそう思つた。そういうと、俺の憧
れは、こんなにも つ！」

「朝兄……起きろよつ！ 朝斗！ 朝斗お……つ！」

彼なりの正義を突き通したとしても、それは俺が望んでいたもの
ではない。

目の前の男は、俺が彼の立場ならば、必死にしようとしたことを、
放棄した。そうとしか、考えられなかつた。

俺の怒鳴り声と、ミカ先輩の泣き声、そして夏らしくセミの鳴き
声だけがその場所に延々と残つた。

「琴吹君、朝斗君、ごめんね……」

「俺が悪いんです。俺、知つてた……アイツらが来ること」
なのに、全て放り投げて、無責任にも程があつた。一人の幸せを
願つてなんていたというのに。

「お前のせいじやねえ。俺、アイツらを前に何もできなかつた。何
もする勇気が起きなかつた。……それだけだつたつて」「ト」
ほら、やつぱり俺の知つている兄貴の信じる正義は、そういうも
のじやなかつたんだ。なのに、彼はそれを突き通せなかつたんだ。
自分の憧れが不完全だつたと気がつくのが、怖かつた。俺の中で
朝兄は、一番だつた。今となつては朝兄だなんて 彼は、朝斗、
だ。

「だから、『メン。笠原、俺は付き合えない』

「わた、し……もつ。だから 」

朝斗は、ミカ先輩を抱きしめていた。

悔しさに歪む顔を、見られたくなかったのか、彼女の言葉を聞き
たくなかつたのか。

どうせどちらもなんだろう。自分に悔しいままに、自分の気持ち
を果たしたくなんてないんだ。

「Jの前の兄貴の仕返し、ちゃんとしなきやな」

「はっ、俺たちがお前みたいなチビに負けるとでも思つてんのか、ああん？」

俺は心中でほくそ笑んだ。この展開は、いける。

そして俺は、俺なりにきちんとケジメをつけた。

俺のクラスの、朝斗をボコつたらしい不良軍団を、全員ボコり返してやつた。 テニスの授業のシングルスで。

「まぐれだ！ もう一回やれ！」

「放課後テニスコートに来いよ。ダブルスでも返り討ちにしてやるよ」

悔しそうにするヤツらに目がけてスマッシュを打つのは、爽快だった。

これで、俺は朝斗とひとつ差をつけた。アイツらに臆せずに仕返しをできた。

ミカ先輩はまだ朝斗が好きだったらしいけど、朝斗はあんな情けないところ見せて、やっぱり付き合えないと言つた。

俺はなんか、そんな一人を見てたらもう初恋なんてビリでもよくなつてしまつた。

今はそれよりも、朝斗という壁をひとつ越えられたといつ、喜びだけ。

とまあ、俺の初恋の話はこんなもん。

ちなみに朝斗は、ラケットでガチにぶん殴られたせいで一ヶ月くらい学校を休んでテニスの引退試合も出られなくて、でもアイツは不良たちのせいにはしなかった。

朝斗のカメラ趣味が始まつたのはその頃くらいからだつたけど、

ま、俺はその辺あんま知らないなー。

実はさ、俺、高一いつぱいくらい、またサキに同じくらいい憧れててさ。

でもな、桃ちーに一生懸命なサキ見てたら、やつぱり冷めひやつた。

俺つて案外、冷静なタイプなのかもな？ なんちゃって。

新しい恋を探す なんて言つたら大げさだけど、なんかそういう感じに色々考えてるうちに、他の人の真似すること自体がカツコ悪いって気づいた。

だからな、俺は俺だし、っていうかむしろ朝斗と似てるって言われるなんて屈辱……って言つたら言いすぎだけど、嫌なことなのかなつて。

これからは、俺は俺として、『俺』を作つていけたりいーなーつて。

誰もが認めるような、『千種 琴吹』ただ一人をさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349ba/>

Blossom番外編

2012年1月5日23時48分発行